

第22回 京都市自殺総合対策連絡会 会議録

<主な意見交換>

○京都市の自殺の現状について

*事務局より資料1-1について説明。

○平成31年度における京都市自殺総合対策推進計画〔改定〕における自殺対策について

*資料1-2及び資料1-3について説明。

○本連絡会構成機関等による自殺対策の取組と連携の状況

*事務局より資料2について説明。

・京都府は、犯罪の被害者や加害者に占める大学生の割合が全国と比べて高い。これは、京都には多くの大学があり、大学生の人数も多いということが原因であると考えられる。このことも、京都市の大学生の自殺者が多いことと関係するかもしれない。(京都府警察本部)

・資料1-1の「大学生」の区分には、大学院生や留学生も含まれているのか。(会長)

・資料は、国から提供を受けた「地域自殺実態プロファイル(以下『プロファイル』という。)」のとおり表現している。プロファイルでは大学院生の区分について特に示されていないが、恐らく「大学生」の中に大学院生も含まれていると推測している。また、留学生については、警察庁統計に基づく自殺の状況には含まれている。(事務局)

・留学生の自殺対策についても考えていく必要がある。(会長)

・京都市の検索連動型広告事業は、今後も継続して実施するという理解でよいか。また、京都市において、自殺対策と生活困窮者自立支援制度がどのように連携しているのか。(京都司法書士会)

・検索連動型広告事業については、今後も継続して実施する予定である。本市では、自殺対策と生活困窮者自立支援制度との繋ぎについて施策化していない。生活困窮者から本市の自死遺族・自殺予防こころの相談電話に相談があった場合、区役所の生活福祉課に繋げる等、必要に応じて連携している。(事務局)

・どのような経緯で若者が自殺に至っているのか分析しているか。(京都弁護士会)

・プロファイルの中で、背景にある主な自殺の危機経路の例が示されている。例えば、「就職失敗→将来悲観→うつ状態→自殺」等である。皆様が実施されている取組において、自殺者の経緯等について考えるヒントとなるような情報等があれば、御意見いただきたい。(事務局)

・SNSの中でも、多くの学生は、LINEとTwitterを多く活用している印象である。Instagramやface bookは、悩みを抱えた時に投稿するというより、生活の充実感を発信するために活用されている。一方、Twitterは弱音等の本音をつぶやくために活用されている。(学生団体SMILE)

・Instagramとface bookは、いわゆる「リア充」と表現されるような、本人にとって良い知らせを発信する際に活用され、TwitterやLINEでは本音を出す際に活用するというのを聞いた事がある。face bookは実名で投稿するようだが、InstagramやTwitterもそうなのか。(会長)

・InstagramもTwitterも匿名で投稿されている場合が多い。(学生団体SMILE)

・どの種類のSNSにどのような広告を表示するのかを考えて検索連動型広告事業を実施することも重要である。資料1-3については、今年度の10月～12月の3か月間について、前年度の同じ期間と比較して相談実績が伸びたとのことであるが、例えば、7月～9月の3か月間につい

ては、前年度の同期間と比較して相談実績に変化はあるのか。(会長)

- ・9月以前については平成29年度も平成30年度も相談件数に大きな変化はない。(事務局)

- ・10月～12月については相談件数が増加し、9月以前の期間については相談件数に変化がないのであれば、この事業には一定の効果があった可能性が高いと言える。sottoのメール相談事業や、京都いのちの電話の電話相談事業については、受けられる相談件数に限りがあり、現段階で一杯まで対応していただいている状況である。そんな中、相談先として今後も検索連動型広告のランディングページに掲載すべきなのか。相談先として表示されたのに、相談しても繋がらなかった場合、かえって相談者ががっかり感を抱かせてしまうのではないか。(会長)

- ・sottoのメール相談事業をこの事業の中で宣伝することに意義があるのかは一概に意見できない。相談数が多くなればよいという判断ができないものである。受信した1件の相談メールに対して3～4人の相談員が返信文を考えるため、すぐには返信できないが、必ず3日以内に返信する。対応可能件数以上は受信しないようなシステムにしている。(京都自死・自殺相談センター)

- ・メール相談であれば「丁寧に対応するため、返事には3日程度かかります。」、電話であれば「混み合っていて繋がらないことがあります。」等、検索連動型広告のランディングページに記載したほうがよいのではないか。(会長)

- ・参考にさせていただく。(事務局)

- ・こころのカフェきょうとで実施している自死遺族支援の集いには月に30～40人の自死遺族が来所する。18～22歳くらいの若年層の子どもを自死で亡くした方が多い。その方々の事情を聞いていると、学生の進路の問題で、学校の先生や親との考え方に相違が生じ、自分の進路を見出せずに自殺してしまった方が多いことを実感している。国においては、若者の居場所づくりに力を入れていくようであるが、そこがなかなか難しい。今や、LINEやSNSが若者の居場所になっている。京都市は40歳代～50歳代の女性へ更なる施策を講じていくとのことだが、具体的に何か考えているのか。(こころのカフェきょうと)

- ・今後、皆様の御意見もいただきながら、施策を講じていきたいと考えている。(事務局)

- ・部署の垣根や個人情報等の問題もあるかと思うが、自殺未遂者支援について、何かしらの対策を講じていかねばならないのではないか。自損事故の中でも若年層の割合等を把握することも必要である。(京都司法書士会)

- ・広島では、広島大学と連携し、債務や家族等の問題をもつ自殺未遂者に対して弁護士が支援している。京都弁護士会としては、今後は京都市内においても救急科との連携を強化していく必要があると感じている。しかし、弁護士会だけではなかなか難しい。また、救急科と精神科のどちらへアプローチすべきかが難しい問題であると感じている。(京都弁護士会)

- ・G-P ネット（一般科と精神科との連携ネットワーク）の状況はいかがか。(会長)

- ・G-P ネットの研修は、毎年実施している。また、地区医師会においても勉強会等していただいている。本市は複数の救急病院をもっており、連携の仕方が難しい。自殺未遂者を捉える機会は複数あると思うので、どこかと上手く連携できればとは考えている。(事務局)

- ・今、「社会的処方」という考え方がある。社会的処方とは、医者が患者に医療資源や医療制度等を処方するというものである。例えば、うつ病には、発病した背景や経緯が存在する。医者はうつ病の薬を処方するだけでなく、ソーシャルワーカーや弁護士を紹介し、適切な社会資源につなぐという考えを医者自身も持っていることが精神科にも一般科にも非常に重要である。(会長)

・自死遺族支援をしていると、関係機関との普段からの顔の見える連携が重要であると感じる。京都市、京都府、こころのカフェきょうと、京都自死・自殺相談センター、学生団体 SMILE の 5 機関で毎年、自殺予防と自死遺族のためのイベントを開催しているが、顔を知っている機関同士だと、イベント以外でも大変連携がとりやすい。(こころのカフェきょうと)

・SNS の利用者の中心である若年層が、SNS を活用した自殺対策について考えたり、同世代だから分かる若年層の「死にたい」のサインについて、この連絡会で情報共有することが大切だと思っている。(学生団体 SMILE)

・子どもたちにとって学校が、安心できる居場所であるか、悩みを相談できる場であると感じてもらえているかということが大切である。子どもを通して、自殺のハイリスク家庭を把握することがあり、学校だけでは対応せず、スクールソーシャルワーカー等を通じて、子どもはぐくみ室や児童相談所等の関係機関と連携している。スクールソーシャルワーカーの配置人数については、今後増員する予定と聞いている。(京都市小学校長会)

・私学においては、他機関との連携のとりづらさがある。京都府は私学就学支援相談センターを設置し、府内私学全体の相談機能を果たしている。多くの機関と繋がり、連携を図りたいと思っている。また、スクールソーシャルワーカーについても、私学においては配置が十分でない学校も多く、課題であると感じている。(京都府私立中学高等学校連合会)

・友人に悩みを相談したいと思う学生は多い。しかし、迷惑に思われるのではないかと、相談することで関係性が変化してしまうのではないかと、相談内容を異常視されるのではないかと、等という不安感から、友人が身近にいても、なかなか相談できない。若者一人ひとりがゲートキーパーの役割を担えるようにするため、若者に対するゲートキーパー研修を強化して実施することが重要である。(学生団体 SMILE)

・現在、大学生向けのゲートキーパー研修は実施されているのか。(会長)

・平成 30 年度において、大学生向けのゲートキーパー研修は実施していない。「若者に寄り添う支援者への研修会」として、大学及び高等学校の先生を対象に、「SNS の世界で暮らす若者たちへの支援」というテーマで自殺対策の研修を開催した。また、ゼミ等の研究で活用するというところで、大学生側から自殺対策について問合せを受けることがあり、ゲートキーパーの役割等について説明している。

京都府の事業であるが、「いのちのリレー講座」という単位互換制度を活用した自殺に係る講義を大学生向けに実施している。しかし、この講座が 18 時から 19 時半までの時間帯で開催されるということもあり、受講者が少なかった。(事務局)

・健康と医療に関する学部の学生に対しては特にゲートキーパー養成に積極的に取り組むべきだ。ゲートキーパー研修については、1 日で完結し、受講者には受講証明書を発行する等も考えていただければと思う。(会長)

・これまでの自分の経験から、他人と比べずに、毎日「今日の自分に勝っていく」という気持ちで過ごすことが大切だと思った。若者や中高年の中には、過去を引きずりながら将来の自分に悲観的になっている方が多いのではないだろうか。「今」を意識して生きるという考え方ができれば、自殺者も少なくなっていくのではないだろうか。(市民委員)